

2026年8月2日（日）第564回・熊本地震支援の経験と夏の農作業を通じた人材育成

NPO法人グラウンドワーク三島

現場の実践知：被災地再生から若者の自己変革まで

渡辺 豊博氏が語る、災害対策の教訓と次世代育成の哲学

① 熊本地震支援：戦略的再利用の記録

STRATEGY: 独創的再生

- ✓ 全壊家屋から太陽光パネル・浴槽・厨房を回収
- ✓ 集会所に集約し、共同生活拠点を迅速に構築

CRITIQUE: 事前対策の欠如

既知の断層に対する補強放置を厳しく批判。豊富な湧水を活用する浄化装置の転用など、実践的な備えを提唱。

大津村 再生プロジェクト

10日間

拠点完成までの期間

5
水洗便所

5
五右衛門風呂

📅 逆算の農作業カレンダー

- 7月-8月：酷暑の草刈り
セイタカアワダチソウを粉砕。夏の熱で肥料化し土へ戻す重要な工程。
- 9月：種まき
菜の花・コスモスの種をまき、再生した大地に命を吹き込む。
- 2月：開花・収穫
カレンダーの最終目的地。土地再生の成果を収穫する。

🧑‍🌾 現場教育と自己変革

教えるのは「現場の知恵」

効率的なスコップ術

苗が根付く水の受け皿作り

使った道具の泥落とし

「一歩前に出る勇気こそが、自分を変える原動力となる」

社会の光と影を体験し、指示待ちから主体的な変化へ。

高 大 +10 知徳高校・飛龍高校・大学生インターン

📧 次なる一歩：真心のコミュニケーション

定型文ではない「自分の言葉でお礼を伝えること」の重要性を学生へ指導する

渡 @渡辺 豊博

本番組では、NPO 法人グラウンドワーク三島の渡辺豊博氏が、10年前の熊本地震における支援活動の経験を振り返り、災害対策の重要性について熱弁を振るった。

また、酷暑の中で進められている、夏の農作業や森づくりの計画性を詳細に説明、現場活動を通じて、若者に実践的な学びを提供することの教育的意義・意味を強調した。

10年前の熊本地震支援活動の振り返りと教訓

10年前に発生した熊本地震（震度7、マグニチュード7.1、震源の深さ10km）における支援活動の経験が詳細に語られた。

特に被害が甚大で、全戸が全壊した大津町での活動に焦点が当てられた。渡辺氏は、大工や配管工などの専門職人を伴って現地入りし、壊滅した集会所の再生プロジェクトを主導したという。

その手法は、倒壊した家々から、まだ使える太陽光パネル、浴槽、厨房設備、水洗便所などを回収し、集会所に集約するという独創的なものであった。

この活動により、わずか**10**日間で、地区公民館に風呂**5**つ、水洗便所**5**つ、そして、大人が利用できる厨房と食堂が整備され、被災者のための「共同生活拠点」が構築された。

屋根の応急処置としては、耐久性の高い防水シートを張り、その上に回収した太陽光パネルを設置するなどの工夫が凝らされた。

この経験から、渡辺氏は、災害支援においては、一人暮らしの高齢者や文化財的価値のある建物を優先するなど、戦略的な優先順位付けが必要不可欠であると力説した。

また、この地域には、阿蘇山があり、豊富な湧水や井戸があるにもかかわらず、水不足に陥った皮肉な状況を指摘し、浄化装置の活用など、事前の対策が講じられていれば、状況はまったく違っていただと述べた。

断層の位置が、既知・明白であったにも、にもかかわらず、その上の建物の補強対策が放置されていた点も含め、行政の対応を「怠慢」と厳しく批判し、実践的な事前対策・防災減災対策の重要性を訴えた。

酷暑の中での農作業と森づくりの計画性

気温**35**度を超える酷暑が続く中、松毛川流域の耕作放棄地で草刈りなどの農作業や森づくりを続けている理由について、その計画性が説明された。

7月から**8**月にかけて集中的に設定された作業日（各日約**5**時間）は、無計画に行われているのではなく、明確な目的と段取りに基づいている。

現在の作業は、高く伸びたセイタカアワダチソウなどの雑草類を粉碎し、夏の暑さを利用して、畑で肥料化させ、その後、トラクターで土に混ぜ込むという重要な作業工程である。

これは、**9**月中下旬に予定されている、菜の花やコスモスの種まき、そして、来年**2**月頃の開花・収穫という、最終目標から逆算された「農作業カレンダー」に沿った必然的な農作業である。

もしも、この時期に、これらの作業を怠れば、土地を再生させる、これまでの努力が、生育のタイミングと不整合になり、全て無駄になってしまうため、厳しい暑さの中でも、実施する必要があるという。

また、森づくりの観点からも、草の背丈が**1m**程度と比較的低い、今のうちに刈り取ることで、草刈り機・ハンマーナイフモアへの負担を軽減し、根が深く張る前に対処できるため効率的であると述べられた。

これらの説明を通じ、一連の活動が、将来を見据えた、合理的な計画的であることが強調された。

現場活動を通じた若者への実践的教育

NPO 活動の一環として、高校生や大学生をインターンシップとして受け入れ、現場での実践的な教育を行っている様子が語られた。

参加しているのは、心みらい高等学校や知徳高校の 1 年生約 10 名で、今後は、飛龍高校の生徒も加わることを調整しているという。

教育内容は、単なる作業の手伝いにとどまらない。スコップの正しい使い方（足で体重をかけて効率的に掘る方法）や、植樹の際に苗木が確実に根付くための水やりの工夫（水の受け皿となる溝を作るなど）といった、学校では教わることのない「現場の知恵」が具体的に指導された。

さらに、作業後の後片付けとして、使った道具の泥を洗い落とし、整理整頓することの重要性も徹底した。これは、仕事への姿勢や借りたものへの礼儀を教える現場教育の一環であるとされた。

当初は、先生などの指示を待つだけであったり、挨拶もままならなかった学生たちが、厳しいながらも、愛情ある指導を通じて、自ら考え行動し、相手の目を見て話せるようになるなど、主体的に変化していく様子が報告された。

定型文で書かれたお礼状ではなく、自分の言葉で感謝を伝えることの大切さも説かれ、「社会の光と影・現場の難しさ」を体験することこそが、若者の成長に不可欠であるとの信念が示された。

現場経験がもたらす自己変革の重要性

番組の締めくくりとして、現場活動に参加することの根源的な意義が語られた。

暑さ、汗、虫といった困難と苦痛が伴う活動であっても、そこに一步踏み出して参加した人と、尻込みして何もしなかった人との間には、将来的に、大きな差が生まれると、渡辺氏は力説する。

この「一步前に出る勇気」こそが、自分自身を変えるための原動力となる。現場での経験を通じて、自己変革していくことで、個人は、社会が抱える様々な困難や問題に順応し、それを乗り越えていくための実践的な力・解決力を自ら身につけることができる。

渡辺氏は、この自己変革の機会を、多くの人に提供したいとし、グラウンドワーク三島の活動への積極的な参加を広く呼びかけた。